

スペイン語圏を知る本（その26）

『スペイン歴史の旅』

（川成洋著 人間社、2002）

評者 坂東 省次

『スペイン歴史の旅』は、スペイン内戦の研究で知られ著書も多数ある著者自身が初めてスペインの大地を踏んだという1969年7月に開始したスペイン現代史の旅であり、もっと具体的にいえばスペイン内戦の旅である。

本書は1章「懐かしさと嬉しさの交差点 - 独断的スペイン案内」、2章「歴史と文化のうねりの中で - スペイン内戦」、3章「政治と人間の壮大なドラマ - スペイン内戦その後」、4章「日本とスペインの関係を探って - その多様な人間模様」の全4章からなる。第1章「独断的スペイン案内」は、スペイン現代史を知るためのウォーミングアップとして読まれるとよい。闘牛とフラメンコで知られる独特なスペイン文化に触れた後、スペインの有名な観光都市 - マドリード、バルセロナ、バレンシア、セビリアなど - を散策しながら歴史も学べる仕組みになっているからだ。しかし、「のどかで明るい南国情緒豊かなセビリアも、スペイン国民を二分して熾烈な戦いを繰り広げたスペイン内戦(1936-39)を避けることはできなかった。」といった各所に仕組まれた内戦に関する文章を読みながら、読者はいやおうなしに「スペイン内戦物語」という壮大な人間ドラマの世界に足を踏み入れることになる。

「第2次世界大戦のリハーサル」あるいは「新兵器の実験場」といわれたスペイン内戦とは一体何であったのであろうか。これはわれわれ人類にとって永遠の問いであるように思われるが、その問いに答えるべく著者は、内戦に立ち会った人々の足跡を追ってスペイン、イギリス、フランス、アメリカそして日本と、世界を駆けめぐる。2章「スペイン内戦」、3章「スペイン内戦その後」そして4章「日本とスペイン」では、すでに日本でもおなじみのロルカ、キャバ、ヘミングウェイ、ジャック白井らの足跡を追いながら、読者もまた

臨場感いっぱいの「スペイン内戦物語」をたっぷりと味わうことができよう。

スペイン内戦といえば、併せて、フランコが存在が気になるのは筆者だけでは

ないだろう。では、内戦研究の専門家である著者のフランコ評価はいかかなものであろうか。本書の第2章に「フランシスコ・フランコ伝」がある。著者はその最後のところで、次のように述べている。

「フランシスコ・フランコの評価はさまざまである。政治家というものに毀誉褒貶はつきまとう。フランコも例外ではない。だが、彼は長期の軍事独裁政権にありがちな、私利私欲の権化と化してはいなかった。ストイックというべきか、清廉潔白な軍人であり、繰り返しになるが、ヒトラーやムッソリーニとの会談の折に発揮したように、まことに希有な「ナショナリスト」であった。フランコの生涯にわたって一貫して流れていたものは、「ラテン気質」とは全く無縁の、彼の生誕の地であるエル・フェールで育まれた、慎重さを旨とする「ガリシア気質」なのである。」

また、戦後のスペイン国民の自由を奪ったのがフランコなら、今日の自由と繁栄のスペインを作ったのもまたフランコであり、それだけに、フランコの善悪の判断は極めて難しいのである。あとの判断は世界史に委ねるしかないのではないだろうか。

ところで、本書が、スペインの生んだ世界的名作『ドン・キホーテ』で終わっているのはなぜだろうか。スペイン内戦ものが続かなかで、『ドン・キホーテ』に出くわす読者はそれを奇異に感じるかもしれない。しかし、スペイン内戦に身を投じた多数の戦士たちの雄姿のなかに著者は、理想と正義のために闘ったドン・キホーテのヒューマニズムを見ていると考えれば、決して場違いでもないと思われる。逆に、『ドン・キホーテ』を読んで、そこからスペイン内戦を考察してみるのも、新しい見方になるかもしれない。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）

